

CAROL CHRISTIAN POELL

1975年2月12日生まれ、オランダ・アムステルダム出身のファッションデザイナー。1996年卒業したオランダのアムステルダム大学で、3年連続、サウスアムステルダム大学でファッションデザインを学んでいる。2000年、自身のブランド「CAROL CHRISTIAN POELL」を立ち上げた。2001年、パリ・コレクションでデビューした。2002年、パリ・コレクションでデビューした。2003年、パリ・コレクションでデビューした。2004年、パリ・コレクションでデビューした。2005年、パリ・コレクションでデビューした。2006年、パリ・コレクションでデビューした。2007年、パリ・コレクションでデビューした。2008年、パリ・コレクションでデビューした。2009年、パリ・コレクションでデビューした。2010年、パリ・コレクションでデビューした。2011年、パリ・コレクションでデビューした。2012年、パリ・コレクションでデビューした。2013年、パリ・コレクションでデビューした。2014年、パリ・コレクションでデビューした。2015年、パリ・コレクションでデビューした。2016年、パリ・コレクションでデビューした。2017年、パリ・コレクションでデビューした。2018年、パリ・コレクションでデビューした。2019年、パリ・コレクションでデビューした。2020年、パリ・コレクションでデビューした。2021年、パリ・コレクションでデビューした。2022年、パリ・コレクションでデビューした。2023年、パリ・コレクションでデビューした。2024年、パリ・コレクションでデビューした。2025年、パリ・コレクションでデビューした。



EVERYBODY WORKING

1



NOBODY WORKING

2



MYSELF SIZE 48

3



MY SHOES + OTHER STUFF



IRON LADY

4



LONG TABLE LONG WORK

5



TOO LATE

6



JUST ARRIVED



WORKING MATERIALS

7



THE PRODUCT

8



TRAIL

9



PARTNER - OFFICE - YOU LEFT



TRYING PENDING WITH
MURRAY HARR SWISSER

13



MURRAY IS A GREAT
(MURRAY)

14



TOO MUCH

15



...MOVING FORWARD

キャロル・クリスチャン・ボエル

Q. オーストリア生まれのあなたですが、ミラノのポリテミカアカデミーで学んだ理論と、クレーシヨンの概念をミラノに運んだ理由を教えてください。

A. イタリアで既にフリーランスデザイナーとして働いていて、何か違ったトレーニングを受けたいと思ったので、そこでテラーとしての職修行を学んだ後、やはり仕事のためにミラノに渡りました。

Q. あなたは作品を発表する方法として、ショーではなく、靴の工場や大学の履修所などで製品のプレゼンテーションを行なっていますが、その理由を教えてください。

A. 私が作る履(CLOTHING)は、商品(GARMENT)の概念とはかけ離れたものも多いので、発表しないほうがいいのではないかと思うことも時々あります。ショーという形式だと意図がかかるので、昔の注意が払われがちですが、プレゼンテーションの場合には、場所自体が持つ空間感や材質感が、私が表現したいものを持つてくれることがあるのです。

Q. あなたのクレーシヨンで、いちばん初めに着手するものは何ですか。

A. 素材がまず第一で、デザインはその後からついてきます。コンセプトは最初からあります。それは私のパーソナリティの一部であり、自然に成長していくものなのです。

Q. あなたの素材に対する考え方を教えてください。

A. 素材が製作するうえでいちばん大切な部分です。素材自体で独自の意図を持ち、たくさんのことを伝えます。人は素材から何かを感じたり、見たり、匂いにかき寄せたり、聞き取ることもできるので。

Q. トラディショナルなテラリングと、独特の素材やカットングなどの斬新な手法を結びつけることに難しさはありますか。

A. 今日、最も難しいものの一つは、仕立て、素材、モダンデザイン、テクノロジーをもってさまざまな実験ができるということです。

Q. あなたにとってのトラディショナルとアンキヤルドの定義を教えてください。

A. 伝統は過去から得た知識を相続したあふです。アンキヤルドという言葉を質問書に使っていますが、アンキヤルドは進歩的な独自の考え方をです。フランス語からの訳訳は「歴史または集団の先立つ、決してトレンドでもファッションブルでもないのです。

Q. 2001-2002秋を「フレンド」ともつけられた子豚の刺繍を使ったバッグに関して、この作品のコンセプトをあなたの言葉で説明していただけますか。

A. 昔、ペットとして動物を飼いますが、結局はアクセサリーの一つのような扱いしかしません。動物のニースや生まれるまでの有り様は完全に無視されています。犬と一緒に走ったり、近所を一回りする程度の散歩さえしない人もいます。そして言葉をやるのに驚きと、まるでいろいろな言葉を捨てるように投げ出してしまったりします。

Q. あなたはメディアの顔を見せないことでも知られていますが、それはなぜですか。

A. ファッションデザイナーたちの「GLAMOURIZATION(美化すること)」に参加する義務がわからないからです。もしもそういうことが目標なら、ポップスターになったほうが良いと思う。私がしているのは、創作行為です。

Q. 現在あなたのデザインスタジオは何人のスタッフで働いているのですか。

A. 6人です。それぞれが独特な役割を持っています。

Q. 国籍や出身地がご自身の作風や仕事にしかたに影響を及ぼしていると感じますか。

A. 無意識的に影響を与えられていると思います。でもどのようになか、何がどこでどういうのをかき取るのとは不可能です。人間はほんとうにたくさんのことから知らず知らずのうちに影響を受けているものです。私は自分自身を分析したりしないし、それよりもアプリケーションのほうに興味があります。

Q. あなたがデザインする国の世界を端的に言い表すとしたら、どのような影響詞、あるいはキーワードがいちばんささむかしいと思いますか。

A. ACCIDENTAL(偶発的)、FLAWED(ひびの入った)、IRONIC(皮肉的な)、S TRANGE(不可思議な)。

Q. ご自身にとってエコファッションだったと思われるコレクションは?

A. すべてのコレクションが私にとっては意識的ですが、どのコレクションもその過程というのにはらくて大変なです。コレクションを研究し始めるはひどく恐ろしく感じるのですが、少し時間をおくと両点かと思ったほど楽になります。と思います。

Q. 2002春夏メンズコレクションであなたが表現したかったことは何ですか。

A. 「トラディショナル・エスケープ」種類のあまり文字的なもの。

Q. かつて影響を受けた、あるいはインスパイア、リスベクトを感じるデザイナーは?

A. 尊敬するデザイナーはたくさんいます。でも誰からのデザインにも必ずしも影響を受けているように感じています。それよりも誰かの一貫性とオリジナリティに魅惑しています。1940-50年代に活躍したチャールズ・シユームスというアメリカのキュチュールデザイナーがいますので、詳しい例です。クレーシヨンで進歩的なデザインにたけた人でした。若い世代のデザイナーたちに関しては、私とはあまり結びつきがないように感じます。たぶん私は自由、そう感じないし、何が心配しているのがよくわからなくなったりするので。

Q. 時代の変化があなたの創作活動に及ぼしたいい点か悪い点か?

A. 現在、技術的には賢くべきことが可能になり、それは偉大な創造の自由を与えてくれます。反面、時間や費用がかかりすぎるという理由から忘れられていく過去の技術やアプリケーションを見るのは悲しいことです。

Q. 過去のモードと比較して、現代のモードが失いつつあるものは何ですか。

A. 服の流行はより多様性を失っています。その意義と社会的関係がなくなってしまうからです。事実、モードは強制的になってしまっています。そのほとんどは自己推賞とスタッキング、そしておもしろい対象になっているようです。

Q. クレーシヨンにとって最も必要だと思われる資質は何でしょうか。

A. 自分なりの視点を持つこと。

Q. 子どものころ、あるいは大人になってから、自分は好きだったと思う職業は?

A. テラリングの学校に行っていたときに、こういうやり方でものを作るのが面白いとわかったとき。

Q. 最も興味のある、あるいは影響を受けた映画、音楽、アート、文学は?

A. 私の嗜好は個人的なものなので……。

Q. 20世紀のファッションシーンで最も印象深かった出来事、ムーブメントは? また、21世紀にも、時代を揺るがすような大きなムーブメントの可能性はあるでしょうか。

A. '90年代、東洋主義という理由で、すべての世紀にどの方向性を決めるための「90年代」があると思います。

Q. ヨーロッパを中心に発展してきたモードの歴史に、アジアやアフリカの国々はこれから先どのように参加していくと思いますか。

A. アフリカとアジアは世界の中で最も古い文化を持つ地域であり、今もなお、強い伝統の中に生きています。ファッションの中に統一感なく融合していくと思います。

Q. 東京に関して、先づきたい浮かぶイメージは何でしょうか。

A. スピード、デカダンス、フェティシズム、トラディショナルとウルトラモダンの両側。

Q. ファッションという観点から見て、東京にどのような印象をお持ちですか。

A. すべてのスタイルが存在し、それらのほとんどが完璧で特別なものである。ファッションに関して敬意を払う意識が日本には存在していると思います。

Q. 今最もおもしろいと思われるマガジンは何ですか。

A. "National Geographic", 生命と自然についての雑誌なので、ファッション誌というのとは全く異なる視点から見ています。たまたまそれは広告についてですが。

Q. "MRハイファッション"をごらんになって、どのような感想をお持ちですか。

A. 残念なのは私は日本語が読めないのですが、写真を見るとファッションの解釈の違いというのが見えてきて興味深いです。

Q. "MRハイファッション"が創刊された20年前(1991年)、あなたはどこで、何を、何を感ぜていましたか。

A. 20年前、私は高校生でした。当時のことについてはあまり覚えていません。ハッピー・バースデー!

●1998年、オーストリア生まれの、ニューヨーク・ブローワーファッションデザイナー、その後、ミラノのポリテミカアカデミーでファッションデザインを学ぶ。2001年、ミラノのポリテミカアカデミーでファッションデザイナーとしてデビュー。2002年、ミラノのポリテミカアカデミーでファッションデザイナーとしてデビュー。2003年、ミラノのポリテミカアカデミーでファッションデザイナーとしてデビュー。